

JANOG42 若者支援プログラム参加レポート

中京大学 工学部メディア工学科 松岡主馬

1 はじめに

本レポートは JANOG42 Meeting in 三重（以下、JANOG）に参加した上での、全般的な感想や参加して得たこと、印象に残ったプログラム、今後の目標についてのレポートである。今回の JANOG は、私の在籍する研究室の担当教授と同研究室の学生からの紹介で参加した。私は IPv6 を利用したネットワークを構築・運用する学生団体 ConvivialNet に参加しており、今回の JANOG でネットワークの運用に関して必要なことを学び、団体の活動にも活かせるようにしたいと考えた。

2 JANOG プログラムに参加して

2.1 全般的な感想

まずは、JANOG のような業界内の各企業や大学関係者が集うイベントの存在が素晴らしいと感じた。競合他社もいる中で、同じ会場に集い、意見を交換することができる場が定期的で開催されていることが今後の日本の通信業界にも大きな存在になると感じた。プログラムに関してもネットワークのみならず、電力やセキュエィティ関連、法律など非常に幅広く取り扱っていたので様々な視点を持つことが重要だと感じました。

2.2 印象に残ったプログラム

印象に残ったプログラムは「つぶらな瞳で総務省」と「続・ブロッキング法の問題」である。

「つぶらな瞳で総務省」では、通信の障害が発生した場合に総務省がどのように情報が回ってくるのかなど、どのように対応しているのか、また現状に対する悩みについて聞くことが出来た。通信に関して精通している人間が総務省にあまり在籍していないため説明等の対応が難しいなどの内情を知ることが出来た。インターネットが普及している今日では、どの組織においても（総務省などの政府の組織においても）通信に関する知識を有することを必要としていることを改めて感じた。プログラムの中では昨年の 8 月 25 日に起きた経路障害について取り上げていた。ISP の約款には自社と世界とを繋げる「通信」を行うことを約束した記述は記載されていないが、総務省の高村氏曰く、通信の範囲は各ユーザーの感じる範囲であり、今日で言うそれは世界と当たり前のように繋がることを指し示している。つまり、世界と通信できないことは障害にあたる。私はこの部分に違和感を覚えた。それではユーザーの言うがまま、思うがままであり、サービスとして成り立たないのではないか。自社ではない ISP が障害を起こして通信に影響が出たとしても、何も対応ができない。しかし、ユーザーたちはクレームを言う。多数決こそが正義であると言わんばかりの実に民主主義的な解釈のような気がしたが、各 ISP たちは上記の高村氏の発言の内容と同じ

ように思っているのかとても気になる点である。

「続・ブロッキングと法的問題」では、DNS ブロッキングについて学校でも鈴木常彦先生からよく聞いていたので今回の JANOG で最も理解しやすいプログラムだった。違法アップロードされた動画や音楽のダウンロードは何年も前から問題になっているが、今回のブロッキングに対して政府は通信の秘密の「違法性の阻却」についての曖昧な文書を発表している。しかし、ブロッキングを行なったとしても、イタチごっこになることは学生である自分たちでもすぐにわかることであり、個人的には政府の考えていることよくわからなかった。通信事業に携わる者であっても、関係する法律について精通しておき、政府の見解についても目を向けることが重要だと感じた。

2.3 今後の目標

今回の JANOG の参加によって今日のネットワーク技術や現状について知ることができた。まずは、学んだことを実際にアウトプットしていく過程で、自分で勉強したいと考えている。また、AS 番号を保持している団体に所属できているというメリットを活かして、実装して上手く運用できるか観察していきたい。さらにその結果を踏まえてさらなる技術のブラッシュアップを図っていきたい。

3 最後に

今回の JANOG が初参加でいろいろと緊張したところがあったが、懇親会も含めて多くの企業の方々が声をかけてくださり、精神的にとっても助かった。また、JANOG に参加し実際の雰囲気を感じたことや、若者支援プログラムの中で同世代たちから刺激を得たことで、今後の ConvivialNet の活動をより活発にしたいという意欲が高まった。今回の体験を仲間たちと共有し、活動を続けていき、次回の JANOG43 では ConvivialNet が登壇者として参加できるように邁進していきます。